Memoirs of Beppu University, 49(2008)

重光葵――一貫して平和を探求した外交官・外相

辻　野　　功

はじめに―不明を恥じる

改進党総裁だった重光葵が鳩山一郎率いる自由党反主流や日本自由党と合同して鳩山一郎総裁・重光葵副総裁で日本民主党を結成したのは1954（昭和29）年11月のことで、私は高校２年生であった。総裁の鳩山が笑顔を絶やさぬネアカの人物であったのに対し、重光はネクラだというのが、私の率直な重光の印象であった。なにしろ新聞で見る彼の写真は真面目一偏で、笑顔のものを見た記憶がない[1]。

12月には鳩山内閣が成立し、重光は副総理兼外相となった。その頃、ミズーリ号艦上に登りマッカーサーの前で降伏文書に署名する重光の映像を初めて見た。シルク・ハットとモーニング・コートは長身でスマートな服装のマッカーサーと対比して、なんと野暮ったいことかと感じた。後に詳述する上海での爆弾テロで右足を失い義足になっていることは、知識としては知っていた。しかし彼に同情するどころか、ステッキの力を借りて歩く姿を不恰好だと思った。

その上Ａ級戦犯として東京裁判で裁かれた前歴がある。他の被告に比べ例外的に軽い禁固７年だとはいえ、日本の侵略戦争への加担者だと信じて疑わなかった。

私ははっきりした根拠もなく、重光に悪印象を持っていたのである。このような重光観を変えるきっかけを与えてくれたのは、外交官だった岡崎久彦氏が著した『陸奥宗光とその時代』・『小村寿太郎とその時代』・『幣原喜重郎とその時代』に続く『重光・東郷とその時代』であった。「戦時中の日本外交は東郷茂徳と重光葵の時代だったといってよい[2]」と喝破された時、目から鱗が落ちた。日本文理大学に着任し大分学講座を開講して重光のことを調べ始めると、今までの自分の不明を恥じるばかりである。重光の真価がやっと分かった。

以来「阿南惟幾と重光葵―日本を破滅から再興の途へ舵切った大分人[3]」、「大分は戦犯県か[4]」を発表した。今回の論考は一貫して平和探求の外交官・外相だった重光の生涯を点描して、かつての私と同様に重光を誤解している方々に真の重光像を示すことである。

１．外交官になるまで

重光葵は父直愿（なおまさ）と母松子の２男として大分県大野郡三重町（現豊後大野市）の多田家の離れで1887（明治20）年７月29日に生まれ、３歳までここで育った。国学者だった父は当時大野郡長をしており、多田家の離れを官舎としていた。多田家は現在銃砲火薬店を営んでおり、本宅も立派だが、離れは豪華でさえある。実は、離れは臼杵藩のお殿様が御成りになる時に使われた建物であったのである。

父直愿は漢籍を常に手に持ち、子どもらには小学校入学以前から毎朝身を清めて神棚の前で教育勅語を朗読させた。これが日課の始まりであった。融通の利かない漢学者であり、葵３歳のと

き郡長を辞し生活に困窮した直愿は、自分の生き方を反省するところ大で、子どもには「これからは日本は世界に飛躍せねばならぬ、自分（父）の様に漢学等をやる様ではいかぬ。大に英語を勉強するが宜しい[5]」と常に言って聞かせた。葵が外交官になる伏線は、父直愿によって敷かれたのである。

ところで父は直愿（なおまさ）。読み難い名前である。彼がまた長男には簇（あつむ）、３男には蔵（おさむ）と読み難い名前を付け、そして２男は「葵」と書いて「まもる」と読ませた。どうしてこう読みにくい名前を付けたのか、未だ筆者は詳らかにしえない。葵は「あおい」としか読めない。しかし中国では向日葵（ひまわり）の意に使う。彼自身は、「葵は向日葵で日に向って足元をまもる、すなわち『マモル』である。花の中の唯一の男性の花とされるのが向日葵である。太陽が朝東に出る時は、葵花は頭をもたげて陽に向い、夕べに至って頭を垂れて眠る。それで葵は誠実の象徴とされている[6]」と説明したそうである。事実彼は向陽と号して、漢詩や和歌を創り、絵を描いた。

父が郡長を辞してからは杵築市八坂の重光家本来の家に帰った。ここから一家の生活は母松子の細腕に委ねられた。貧苦の生活であった。しかし松子は慈愛の母親であり、貧乏を蔑む人に対しては毅然たる自負心を失わぬ女性であった。葵の母に対する尊崇の念は父に対するのとは比較にならなかった。葵が外交官試験に合格し外交官補としてドイツに門司から船出するさい大分に立ち寄った時には、母は「自分はもう死んでもいゝと思ったがこれから長命せねばならぬ[7]」と涙を流した。

慈母松子は1920（大正９）年２月３日に没したのであるが、そのとき葵はパリ講和会議の随員としてパリに駐在して１年余りであった。訃報を聞いた葵はホテルの１室で数日男泣きに泣き暮らした。一生母の喪に服そうとさえ思った程であった。

さて慈母の膝下で育った葵は、1899（明治32）年に八坂小学校を卒業して大分中学校杵築分校（翌1900年には独立して杵築中学校となる）に入学した。杵築中学は人材育成で光り輝く中学であり、３年上級にはロンドン軍縮会議の責任者・堀悌吉海軍中将がおり、１年上級には最後の軍令部総長・豊田副武（とよた　そえむ）海軍大将がいた。

日露戦争の始まった1904（明治37）年、熊本の第５高等学校の独法科に入学した。ドクトル・フォン・ハーン教授に大変可愛がられ、貧乏学生の葵はハーン邸に住み込み、彼に日本語を教える代わりにドイツ語を教えてもらった。

２．天長節の悲劇

1931（昭和６）年９月18日に満州事変が起こったとき、重光は特命駐華全権公使であった。彼は「今次軍部の行動は、所謂統帥権独立の観念に基き、政府を無視してなせるものの如く、折角築き上げて来たれる対外的努力も一朝にして破壊せらるるの感あり。国家の将来を案じて悲痛の念を禁じ難し。この上は一日も早く軍部の独断を禁止し、国家の意思をして政府の一途に出でしむる事とし、軍部の無責任にして不利益なる宣伝を差止め、旗幟を鮮明にして政府の指導を確立せられんことを切望す[8]」と、外務省に打電した。そして南京中央政府の中枢人物である宋子文財政部長と局地解決を図るべく努力した。しかし衆寡敵せず、成功しなかった。次善の策として、満州での日中の対立を中国全土での対立に拡大しないように努力した。だが日本政府は満州問題を南京中央政府とは交渉せず、満州の地方政権と交渉する姿勢を変えなかった。一方、南京政府側も「満州におけるその後の発展は全く日本軍の計画的行動で、もはや手がつけられない[9]」として国際連盟に提訴した。

満州事変は満州国建国を目的としていたが、満州国建国から国際的視線を逸らす謀略として、上海日本公使館付き陸軍武官補佐官の田中隆吉中佐らは関東軍参謀板垣征四郎大佐らの依頼により、中国人を買収し寒修行する日本人日蓮宗僧侶と信者５名を1932（昭和７）年１月18日に襲撃死傷させ、抗日運動の中心地上海で険悪な情勢を醸成し、日中の軍事衝突を生み出した。「爆弾三勇士」で有名な上海事変である。日本政府は約３万人の日本人居留民保護のために、１月末に野村吉三郎中将を司令官とする第３艦隊と陸戦隊約7000人を、２月初めには金沢第９師団と久留米混成第24旅団を派遣した。しかしそれでも足りずに前陸相・白川義則大将を総司令官に善通寺第11師団・宇都宮第14師団を派遣した。

３月３日には、日本側の目的だと国際的に声明していた上海地区を脅かしている十九路軍の撃退は達成された。直ちに重光は「日本軍は今日上海における戦闘の結果、出兵の目的は完全に達成した。よって、直ちに全軍にわたって停戦することに決定した[10]」との声明を、AP、UP、ロイターの外国通信社はもちろん、日本の連合、電通にも発表を依頼した。それと同時に陸軍司令部に駆けつけ白川総司令官に停戦の決断を要請した。朝８時ごろ始まった会談では、重光が繰り返し同じ言葉で停戦を説いた。しかし白川は黙然と聞くのみであった。最後に重光は「いまわれわれは上海における軍部と外交の責任者として、国家の重大事を相談しているわけである。その結果は日本の将来の国運に少なからず影響すると思う。東京の宮中においてはさぞかし天皇陛下はこのことについて御心配をされておられるでしょう。恐縮に堪えません[11]」と言った。白川総司令官は、しばらく熟慮のあと起立して「白川は戦争を止めます。停戦命令を出します[12]」と言った。午後１時のことであった。実は白川は天皇陛下に拝謁した際、「お前はなるべく早く目的を達して、遅滞なく軍を引揚げて帰って来い[13]」と言われていたのに、参謀本部からは上海攻略のあと「貴軍は太湖に向って進軍することを期待する[14]」との電報を受けていたのである。この日、国際連盟では上海事変を討議することになっていた。タッチの差で上海事変は議題から消え、日本は辛うじて面目を保った。重光の功績である。

正式の停戦交渉は難渋を極めた。日本軍部の要求と中国側の要求を調和させねばならない上に、国際都市上海のこととて、英・米・仏・伊などの意向も斟酌せねばならなかったからである。３月19日に始まった交渉は何度も決裂の危機に見舞われたが、重光の粘り強さと卓越した外交手腕によって４月28日に停戦協定の案文が合意出来た。

翌29日は天長節であった。上海新公園（日本人は新公園と呼んでいたが正式には虹口〈こうこう〉公園、1998年魯迅公園と改称された）では観兵式のあと居留民団主催の一般祝賀式が行われた。村井総領事の祝辞のあとの君が代斉唱が終わろうとした瞬間、異様な形をした金属性のものが式台の上に投げ入れられた。「爆弾だ!!」との声と共に急激な動揺が始まった。重光は不動の姿勢で君が代を歌い続けていたが、突如として「鬼の金棒か何かでしたたか強く打ち付けられた感じがした[15]」。「やられた」と思うと同時に「ひょっとしたら此爆弾事件から停戦交渉が不調になって更に大事に至りはしないか[16]」との思いが頭によぎった。式台に倒れていた時、「朝鮮人の奴がこんなことを仕出来しやがって、あんな奴はたゝき殺してしまえ!![17]」と叫ぶ声を聞いた。重光は身辺に駆け寄ってくれた領事館の花里警察署長に「犯人は取り逃がさぬ様厳重捕縛は必要だが之に虐待暴行を加ふる如きは一切厳重に取り締って貰ひ度い[18]」と厳命を下した。

福民病院に担ぎ込まれてみると、傷口はちょっと数えただけでも160余りあった。しかし重光は冷静沈着に「本使今回の負傷は或は致命傷に非ずとするも頗る重症と判断せらる。（中略）然る処今回の事件に拘はらず停戦協定は此儘成立せしめること国家の大局上から見て絶対必要と愚考す[19]」と芳沢外相宛に意見具申した。第２のサラエヴォ事件だと激昂する日本人が少なくなかったのである。

５月５日午前、待ちに待った停戦協定がベッドに届けられた。重光は上半身を起こしてもらい、無事署名することを得た。署名を終えると重光は、立ち会っていた張似旭書記官に対し「日支の姿は本来親善でなければならぬ、この文書が将来日支親善の出発点とならんことを祈る[20]」と挨拶した。そしてその直後に右脚切断の手術が行われた。執刀は外相が派遣してくれた九州大学の後藤七郎教授であった。術後の経過ははかばかしくなかった。病院の設備も医薬品も不備であった。そこで九州大学で再手術することになった。６月、蒸し暑く長い船旅のあと長崎に上陸し、陸路福岡に向った。耐え難く痛い長旅であった。再手術によって左脚や右手から弾片の摘出を行い、８月１日ようやく退院した。そのあと別府で８ヵ月療養した。最初は九州大学温泉治療学研究所で、ついで和田豊治別邸（後の中山別荘）において。

重光は1933年３月まで別府に滞在した。３月３日は思い出深い停戦１周年であったが、この日に因んだ秘話がある。重光と同じく傷を受けた白川義則大将は、当初軽症と思われたが余病を併発して５月26日に死亡した。停戦１周年の３月３日、昭和天皇は白川大将を偲ばれて「をとめらが雛まつる日に戦をば　とどめしいさを思ひ出にけり」との和歌をお詠みになり、白川家に下賜された。しかし「これは十年間秘密を保ってもらいたい[21]」との本庄繁侍従武官長の伝言付であった。「そうでないと満州方面や支那陸軍部内においても不満を生ずるかもしれない[22]」からだったという裏面の事情を、和歌下賜のお使いに立たれた鈴木貫太郎侍従長（海軍大将、後に首相）は戦後になって明らかにした。天皇の和歌が明るみに出たのは戦後になってからのことである。このような時代に、重光は中国との停戦に命を懸けていたのである。

３月26日、別府を緑丸で発った重光は、神戸に上陸し伊勢神宮・桃山御陵を参拝し、４月５日夕刻横浜に到着した。重光と同じ爆弾で右目を失明した野村吉三郎大将（３月昇進、のち外相・駐米大使）が出迎えてくれたのは、望外の喜びであった。翌朝東京駅に着くと内田康哉外相らが出迎えてくれたが、そのまま皇居に向った。天皇陛下からは力強い声で勅語を賜り、重光は感泣して退出した。皇后陛下にも拝謁し、「上海に永い間難局に当り善処しつゝある際計らずも重傷を負い誠に気の毒であった。幸い快方したのは何よりである[23]」とのお言葉を賜った。重光は、またもや感激に涙して退出した。翌々日には天皇のご陪食があり、種々のお尋ねとねぎらいのお言葉があった。なお重光の義肢は、皇太后（大正天皇の貞明皇后）から下賜されたものである。

３．張鼓峰事件

重光は５月には外務次官になった。９月には前駐ソ大使廣田弘毅が外相となり、この廣田の下で重光は1936（昭和11）年の２・26事件まで次官を務めた。２・26事件後首相になったのは廣田であった。組閣に対し、陸軍は自由主義者と見られる吉田茂が組閣参謀であること及び彼の外相起用への反対を始め、露骨な干渉をしてきた。廣田は陸軍の干渉を受け入れて組閣した。軍部大臣現役武官制も、陸軍の要求によって復活した。軍、特に陸軍の専横を制度的に可能にする途を文官の廣田が開いた。外務省でも軍部と通ずる革新派が重光次官排斥運動を始めた。廣田首相は駐華大使として赴任したばかりの有田八郎を外相とし、駐華大使に重光を予定したが、陸軍が重光の人事に横槍を入れてきた。そこで陸軍の意向に配慮した廣田首相は、重光を駐ソ大使とした。11月25日、重光はモスクワに着任したが、その日は日独防共協定締結の日であった。

重光が駐ソ大使時代に遭遇した最大の難問は張鼓峰事件であった。1938(昭和13)年７月12日、満州国と朝鮮とソ連沿海州の三つの国境に近い張鼓峰をソ連が占領した。かねてより日本側は張鼓峰を満州領内であると主張し、ソ連はソ連領内であると主張して、その帰属は日ソ間の懸案であったのである。重光は、ソ連の国境警備隊が充実している現状では、ソ連軍の即時撤退要求交

渉は容易ではないと憂慮した。しかし20日にリトヴィノフ外務人民委員（外相）と会見し、進出したソ連軍を元の所に撤退させ、その上で双方から委員を出して争いとなっている国境線を決めることが実際的な方法であると主張した。20日の交渉は双方の主張を強く主張したままで物別れに終わった。ところがその10日後の30日夜半にいたって、この方面を守備していた朝鮮軍（司令官・中村孝太郎大将）の張鼓峰方面の１個大隊が、ソ連占領の張鼓峰頂上に夜襲をかけ、これを奪い返した。しかしソ連軍は８月２日夜から、多数の戦車を繰り出して逆襲してきた。さらに飛行隊が日本軍前線の後方にある北朝鮮及び間島を連日爆撃してきた。日本軍の第一線部隊は大打撃を受けた。このような日本不利の状況下で４日に再び重光はリトヴィノフと会見し、交渉を再開した。重光は従来の提案を執拗に繰り返した。しかしリトヴィノフが受け入れるはずがない。激戦が未だ続いている10日、重光は最後の妥協案として日本軍のみ一方的に１キロ撤退して衝突を回避し、その上で国境画定交渉に入りたいとの提案をした。ところがなんとリトヴィノフが、従来の重光提案をソ連側の新しい提案として出してきた。重光に異論のあるはずがない。ここに張鼓峰事件は解決をみたのである。

戦闘に勝っているソ連側がなぜ譲歩したのであろうか。政府からの訓令は当初は非常に強硬だが終りに行くに従い急角度に軟化したが、重光は終始一貫、衝突を回避するため両軍が撤退し、その上で対立している国境線を確定する作業に入ろうと主張した。そして交渉の終わる度に内外の記者団に交渉の経過を詳細に伝えた。その結果、日本側は平和を目的とする主張を一貫させているとの報道が欧米の新聞に出るようになった。日本側が平和を探求しているのにソ連側が好戦的であると、欧米の新聞には感じられたのである。重光のマスコミ対策の勝利であった。停戦協定は日本側の外交的勝利とみなされた。しかしこれがリトヴィノフの威信を大きく傷つけた。そのしっぺ返しを重光は東京裁判で食らうのであるが、神ならぬ重光の知りうることではなかった。

４．チャーチルと日英不戦の途を探る

重光は英国大使に転じ、10月25日、ロンドンに着任した。翌1939年９月１日には、ドイツ軍がポーランドに侵入し、第２次世界大戦が勃発した。荒野でただ１人ヒトラーの脅威を叫んでいたチャーチルが海相として表舞台に復帰した。そして翌1940年５月11日にはチャーチルを首相とする戦時挙国一致内閣が成立した。３日後の13日にチャーチルは下院で、「私の提供しうるものはただ血と労苦と涙と汗だけである。（中略）われわれの目的は何かと問われるならば、私はただ一言で答えうる。曰く、勝利。いかなる犠牲を払っても勝利、いかなる恐怖を克服しても勝利、道はいかに長く険しくとも勝利。何となれば、勝利なくしては生き残りえないからである[24]」と、いわゆる「血と労苦と涙と汗」演説をして全国民を奮い立たせた。重光はチャーチルの不屈の姿勢とそれに全面的に応えるイギリス国民を見て、イギリスの必勝とドイツの必敗を改めて認識した。

チャーチルはドイツ軍がセダンを突破し北仏に迫った後、英仏軍の共同作戦についてレイノー仏首相・ペタン陸相・ウェーガン総司令官らと協議するため、５月31日パリに飛んだ。その日には海相時代、日本大使館の午餐会出席を約束していた。チャーチルは約束を違えず、パリからとんぼ返りをして日本大使館に姿を現した。首相就任後初めての公式招宴出席であったので、世界中の注目を集めた。

席上、重光は「さきの大戦のサプライズ（驚異）だったタンクを最初に使用したのは貴下だったでしょう」というと、チャーチルは「貴下のいわれる意味はタンクをまず使用した自分が、こ

んどはドイツに逆用されて後悔している意味でしょう」と応えた。しかし重光は「私のいわんとした意味は、前の大戦のサプライズを案出した貴下が、こんどの戦争でいつサプライズを出されるだろうかというのです」といったが、これには列席した他の外交団も大いに和した[25]。チャーチルは戦局が極度に悪いことを肯定しながら、「こんな時はチーヤフル（明朗に）やっているに限る[26]」と言った。重光は「英国は国家存亡の危機に際して好き指導者を得た[27]」と思った。

９月27日、日・独・伊三国同盟が成立した。三国同盟反対を唱える米内光政内閣を、畑俊六陸相を辞職させることによって倒壊させ、代わって登場した近衛文麿内閣によってである。三国同盟の大きな対象はイギリスであった。そのイギリスの宰相チャーチルと、重光は翌1941年２月24日に首相官邸・ダウニング街10番地の閣議室で会見した。チャーチルは「日英同盟締結の当時、一の青年政治家として議会に議席を有して賛成演説を行ひたる[28]」思い出から語り、「最近両国関係の悪化は実に遺憾至極なりとて、若し両国が衝突するが如きこととなりては正に世界の悲劇なり[29]」と痛嘆した。これに対し重光は「この際単に日英両国が互に攻撃するの意思なきを証言するに止まらず、過去の遺憾なる出来事を一掃し誤解をなくする為めに更に積極的な政策を樹立すべき秋（とき）と思考す、即ち太平洋問題に付て日本も英国も米国も将又支那も総て隠忍に努め、相互の好意と了解とに基く建設的平和政策に進むべき[30]」だと力説した。腹蔵ない意見交換は、チャーチルの日本観を変えるには至らなかったが、重光が平和探求の外交官であることを強く認識させた。重光は３月10日にも、チャーチルと会談した。チャーチルは閣議室壁上の地図を指差しながら「日英関係は地理的関係より何等衝突の間柄に非ず[31]」と力説した。もちろん重光も同感であり、両者の相互理解は一段と深まった。しかし重光は会談後、その悲観的な所感を次のように記している。

> 日英間の国交の打開は、三国同盟締結後の今日至難であることは素よりである。唯一の望みは、日本が此の前後の瞬間に於て世界政局の大勢に目醒め、ブラフ政策から現実の政策に移ることであって、斯くして戦争の窮状より脱しようとする英国の努力と競合して支那問題解決の血路を見出さんと思った点である。
>
> 然し、日本の病は既に膏肓に入って居って、欧州の戦勢も世界の大勢も素直に見様とはしない[32]。

三国同盟を結成して得意絶頂の松岡洋右外相は1941（昭和16）年３月上旬東京を発って訪欧の途についた。松岡は往路モスクワから重光に対し、ヨーロッパのどこかで会談したいと電報を打ってきた。重光も松岡外相に建言したいことが沢山あり、中立国スイスで会見するための手筈を整えた。英国側もチャーチル直々のお声がかりで、飛行機の準備など特別の便宜を図ってくれた。ところが松岡はモスクワへの帰りを急ぐので中立国へ立ち寄る暇などないと、英国と交戦中の敵国ドイツの首都ベルリンへ来るようにと言ってきた。重光は、この非常識な松岡の提案を断固拒否した。かくして英国との交渉は行き詰まってしまった。外務省辞任を決意した重光は、事務打ち合わせを口実に帰国願いを出して許可を得た。

６月12日、重光は帰国の挨拶のためチャーチルを訪問した。チャーチルは会見の最後に、「私は今日英国を指導する地位にあるが、あくまで堅い決心で戦争を遂行するつもりである。貴下とはあるいは再びお目にかかることもできないかと思う。私自身はいつ爆撃を受けるかもしれないが、英国はなんの変化もなくこの戦争を遂行するであろう。私も長く指導の地位にあって、将来日英関係の根本的改善についても自ら指導に当たることは大いに切望しているところである[33]」と、述べた。途中でチャーチルは我慢しきれず両眼から熱涙がほとばしり出た。重光はチャーチ

ルに対し「グッドラック」を祈り、「あなたに神の守護あるべし[34]」と述べ、堅い握手をして別れた。チャーチルは丁寧にも、重光を出口まで送ってくれた。重光は、「英国はよい闘士を指導者にもったものだ[35]」とつくづく思った。

重光はアメリカを経由して、1941（昭和16）年７月に帰国した。重光は宮中の御前講義においても参謀本部での将校全員を前にした講義においても、英国民は堅忍不抜であり、米国の参戦が実現すればドイツの運命は定まる、日本は欧州戦争に介入してはならず、現に着手している日米交渉を成功させ、中国問題を交渉によって解決せねばならないと力説した。枢軸謳歌の日本である。重光は英米派として憲兵の尾行が付くようになった。

重光は対米英戦開始の11日後の12月19日、駐華大使に任ぜられた。翌1942年１月10日に南京に赴任した重光は、日本は内政干渉を行わず、日中間に平等関係を樹立して中国の自主的再建を援助し、最終的には中国から撤兵する「対華新政策」を実行せんとした。そのような重光を東条英機は1943（昭和18）年４月の内閣改造の際、外相に起用した。否、内閣改造の目的が重光の外相起用であった。東条は、重光の「対華新政策」を東亜（東アジア）全域に及ぼして欲しかったのである。

５．外相として

外相になった重光は、米英の大西洋憲章に対して「東亜の解放」を戦争目的にした大東亜新政策を樹立した。大東亜新政策は11月に東京で開かれた大東亜会議の「大東亜共同宣言」として結実した。重光は、「東亜解放」を実現できれば連合国側と終戦交渉しなくとも一方的に終戦に持ち込めると、密かに考えていたのである。しかし事態は重光の思惑通りには進まなかった。

重光は外相就任直後に木戸幸一内大臣から、次いで直接に天皇から平和回復の意向を聞かされた。わが意を得た重光は、以後木戸の盟友として平和回復に取り組んだ。東条内閣総辞職後の小磯国昭内閣でも外相として留任した。

外相時代の重光の情勢判断は素晴らしかった。ドイツの崩壊を1945（昭和20）年４月、５月の交わりとし、その後は何時にてもソ連は対日参戦する、そのようなソ連に和平の斡旋を依頼するのは愚の骨頂であり、スウェーデンやスペインなどの中立国に依頼するのを上策としたことである。重光は「永き歴史を有する立派な日本を破滅に陥れるに忍びない[36]」と熱心に和平の斡旋を申し出てくれたスウェーデンのバッゲ駐日公使に、「日本の名誉を救うことを条件として、如何なる平和に米英側が用意をもっているか[37]」を探ってもらうことを依頼した。鈴木貫太郎内閣になり外相が重光葵から東郷茂徳に交代したので、本国に帰国して和平斡旋に乗り出さんとしていたバッゲ公使は東郷新外相も前任の重光と同意見であるかと日本公使を通じて問い合わせてきた。東郷外相は、それは前内閣時代の考えであると言ってバッゲ公使の活動を中止させた。その後東郷外相や近衛元首相がソ連に和平斡旋を依頼しようとして無残に失敗したことは周知の事実である。戦争の帰趨の見通しの正しさと共に、重光の見識の高さを思い知らされる事実である。

小磯内閣総辞職後の鈴木内閣でも重光は陸海相と共に留任の組閣案であったが、中国問題で小磯首相と激しく意見の対立した重光は小磯の逆鱗に触れ、前首相の反対で留任できず、対米開戦時の外相だった東郷が返り咲いていたのである。重光は無役になり三番町の自宅が空襲で全焼して日光に疎開していたが、盟友木戸から乞われて上京し和平探求に協力した。重光は木戸と密かに会談し、「君等は何でも彼でも、勅裁、勅裁と云って、陛下に御迷惑をかけ様とする[38]」と反対する木戸を「鶴の一声」、即ち勅裁＝ご聖断による和平の途しかないと説得した。８月９日、

御前会議として開かれた最高戦争指導者会議ではポツダム宣言受諾賛成の鈴木貫太郎首相・東郷茂徳外相・米内光正海相対反対の阿南惟幾陸相・梅津美治郎参謀総長・豊田副武軍令部総長の３対３の賛否同数になったが、ご聖断によって受諾と決したのである。外務省は「天皇の国家統治の大権を変更するの要求を、包含しおらざることの諒解の下に、右宣言を受諾す」とスイス政府を通じて米国に送達した。しかし米国はサンフランシスコ放送を通じて12日早朝、「天皇及び日本政府の国家統治の権限は連合国最高司令官に subject to するものとす」と回答してきた。subject to を外務省は苦心して「制限の下に置かるる」と訳したが、陸軍は「隷属する」と訳し、阿南等は米国側回答の再照会を主張した。再照会すればポツダム宣言受諾自体がご破算になると懸念した加瀬俊一・外相秘書官兼政策局６課（北米担当）課長は、再び日光から重光の上京を仰いだ。加瀬は東郷外相の下で終戦工作に従事していたが、「終戦外相としては重光が最適任であったろうが、重光を除けば東郷か有田（八郎）かであったろう[39]」・「木戸は、我が外交官中でも、特に重光を信頼していた。彼と東郷の関係は単に友誼的であったが、重光との関係は特に昵懇であった[40]」と重光をこの上なく高く評価していたのである。重光はポツダム宣言即時受諾を木戸内大臣に説き、その木戸が再照会説に傾きかけていた鈴木首相を説得した。14日の御前会議においては再度のご聖断によるポツダム宣言受諾が実現したが、実は重光の陰ながらの働きが決定的に大きかった。このように重光の働きなくしては、ポツダム宣言受諾は実現しなかったのである。

６．降伏文書署名と軍政阻止

ポツダム宣言受諾によって鈴木内閣が総辞職し東久邇内閣が誕生すると、再び重光が東郷に代わって外相となった。東久邇内閣の最初で最大の仕事は降伏文書への署名であった。マッカーサー連合国軍総司令官は天皇及び日本政府代表１名と統帥部代表１名を求めてきた。選ばれたのは重光葵外相と梅津美治郎参謀総長であった。梅津は中津出身、２人とも大分人であった。

重光は「Surrender と言う原語は何といっても降伏ということであり、また敗戦の結果、実際降伏することになったのであって、その事実はこれを十分に承認し、徹底的に意識しなければ、日本の再生は出来ない[41]」との観点から、偽装的表現に強く反対した。だが衆寡敵せず、「終戦」と言う言葉が使われ、今日では定着してしまっている。しかし「撤退」を「転進」、「敗戦」を「終戦」、「占領軍」（the Occupation Forces）を「進駐軍」、「連合国」（ニューヨークに本部のある国際組織 the United Nations）を「国際連合」と偽る日本人は、何時までたっても大人になれないのではなかろうか。

閑話休題。ミズーリ号艦上に赴くに際して重光は天皇に拝謁し、「ポツダム宣言の要求するデモクラシーは、その実、我が国がらと何等矛盾するところはないのみならず、日本本来の姿は、これによって却って顕れて来ると思われます。かような考え方で、この文書に調印し、その上で、この文書を誠実に実行することによってのみ、国運を開拓すべきであり、またそれは出来得ることと思われます[42]」と述べた。天皇は「まことにその通りである[43]」と深く嘉納された。

９月２日、重光と梅津を代表とする日本全権団を乗せた駆逐艦ランスダウン号は航走し戦艦ミズーリ号に相対して止まり、代表団は更に自動艇に移乗して４万５千トンの巨艦ミズーリ号に達した。ミズーリ号はトルーマン大統領がミズーリ州出身であることから選ばれた。ミズーリ号の見上げるような高い甲板まで、義足の重光はステッキの力を借り、喘ぎながら登った。定刻の午前９時、マッカーサー連合国軍総司令官は、次のような簡潔で感動的な演説を行った。

われわれ主要交戦国の代表は平和を回復する厳粛な協定を締結するため、ここに集った。いろいろな理想と思想にからむ問題はすでに世界の戦場で決定されており、もはやわれわれが討議すべきものではない。また地球上の大多数の人々を代表するわれわれは、不信と悪意と憎悪の精神でここに集ったわけではない。

勝者も敗者も含めてわれわれに課せられていることは、われわれがこれから追求しようとしている神聖な目的にふさわしい、より高い尊厳をめざして立上がり、われわれすべての国の国民がここに正式に引受けようとしている責務を忠実に果すことを誓うことである。

この厳粛な式を転機として、流血と虐殺の過去からよりよい世界、信頼と理解の上に立つ世界、人間の尊厳と人間の最も渇望している自由、寛容、正義の完成をめざす世界が生れてくることを私は心から希望している。それはまさに全人類の希望でもある。日本帝国軍隊の降伏条件は諸君の前にある降伏文書の中におさめられている。

私は連合軍最高司令官として、私の代表する諸国の伝統に基づき、降伏条項が速やかにかつ忠実に実行されるようあらゆる必要な措置をとる一方、私に課せられた責務を正義と寛容の心で果す決意であることをここに宣言する(44)。

続いて降伏文書の署名となった。重光は進み出て椅子に腰掛け、達筆で自分の名前を署名し、その後に「0904」と記した。午前9時4分だったことを示したかったのである。入れ代わりに梅津がテーブルに近づき、立ったまま前かがみになって署名した。

重光たちは政府に報告した後、天皇に復命した。天皇は「軍艦の上り降りは困っただろうが、故障はなかったか(45)」と、慰労の言葉をかけた。天皇は重光が天長節に右足を失ったことを深く心にかけていたのである。

重光は宿舎の帝国ホテルに帰り、これから寝ようと思っていた矢先、占領軍総司令部が軍政を敷く布告を発するとの情報を部下から受けた。翌朝午前7時半(46)、岡崎勝男終戦局長を帯同して横浜に赴き、9時半頃総司令部に至り、マッカーサーと会談した。重光はマッカーサーと握手もせずに、軍政が如何に不可なるかを縷々説明した。マッカーサーは「能く了解せり」と簡潔に一語を発した。同席するも黙々と傍聴していたサザランド参謀長は「直ぐ命令を取り消しましょう」と言い、部屋の片隅の机上電話から必要な命令を発した(47)。かくして重光の迅速な対応によって、日本は軍政を免れたのである。報告を受けた天皇は種々のご下問の後、重光に慰労の言葉を一度ならずかけた。重光は感泣して退出した。

7．天長節二度目の爆弾

1946（昭和21）年4月29日の天長節を重光は「斯うやって無事に暮らせることは、ほんとに有難いことだ(48)」と、迎えた。ところがまたもや上海テロ以来14年目の天長節にも爆弾が投下された。重光はなんとA級戦犯として逮捕されたのである。MP運転のジープに乗り組む時、隣家に住む竹光秀正秘書（安岐町出身）に次の詩を贈って、後事を託した。

隻脚ノ騒人鉄獄ニ堕ツ
家亡ビ身滅ビ両児は飢ユ
湘南ノ日夜風浪ヲ思フ
怨ム勿レ方今国破ルル時(49)

そしてその日の日記には、「爆弾のまた落ちて来し天長の　芽出度かるべきその同じ日に[50]」と記した。ミズーリ号艦上で重光と共に降伏文書に署名した梅津美治郎も逮捕されていた。梅津は平和探求の外交官重光の眼から見て、「関東軍司令官として最も軍の統制に力を注ぎ、蘇連との間に事なからしめた人[51]」であり、「軍人として最も戦犯に縁の遠い人[52]」であった。

彼ら２人が何故東京裁判開廷直前になって戦犯に指名されたかの詳しい経緯は拙稿「大分は戦犯県か」に譲るが、未だ有効期間中の日ソ中立条約を破って対日戦に参戦した自国の侵略行為を隠蔽するために日本の方が先に対ソ侵略を企てていたとして、駐ソ大使だった重光と関東軍司令官の梅津がソ連検察団から戦犯に指名されたのである。さらに重光は、張鼓峰事件の外交的解決のさい外務人民委員リトヴィノフの威信を大いに傷つけたしっぺ返しもあった。

東京裁判の訴因は55あるが、重光は訴因１「侵略戦争の全般的共同謀議」、27「対中国侵略戦争遂行」、29「対米侵略戦争遂行」、31「対英侵略戦争遂行」、32「対蘭侵略戦争遂行」、33「対仏侵略戦争遂行」、35「対ソ侵略戦争遂行（張鼓峰事件）」、54「戦争法規違反の命令・授権・許可」、55「戦争法規違反の防止義務無視」で裁かれた。

重光の裁判には、日本の敵国だった連合国側の要人から、重光は平和探求の外交官であったとの友情あふれる口供書が数多く寄せられた。英戦時内閣無任所相ハンキー卿、バトラー元英外務次官、クレーギー元駐日英大使、デイヴィス元駐ソ米大使、グルー元駐日米大使、ケネディ元駐英米大使、バッゲ元駐日スウェーデン公使、グウイン英紙『モーニング・ポスト』元主筆などからである。このように多数の外国人、しかも旧敵国側の外国人によって弁護されたのは重光１人であった。重光は「斯くの如くして表示された友情は私にとっては何物にも替え難き貴重なものであって、無限の感謝を大いなる誇りを以て表示するものである。よしんば永久に巣鴨に繋がれても自分は此の友情を保存し度い[53]」と、述べている。また排日家として有名なアメリカ人新聞記者パウエルが上海事変について検察側の証人として８月６日に登壇したが、その彼が「被告席に重光氏の居るのを見るも、彼は彼処に居るべき人ではない。彼は常に平和人道の為めに尽した人である[54]」と証言したのである。

重光は訴因１・35・54では無罪となったものの、訴因27・29・31・32・33・55で被告中一番軽い刑だが禁固７年となった。

「侵略戦争の全般的共同謀議」の罪を問われなかったのは重光と松井石根[55]だけであった。訴因27・29・31・32・33で有罪になったのは、重光は一貫して平和を探求した外交官・政治家であったが侵略戦争遂行の東條内閣の閣僚になったこと自体が犯罪であるという論理からである。判決文は、次のように述べている。

> かれは共同謀議者の一人ではなかった。実際において、かれは、外務省に対して共同謀議者の政策に反対する進言をくり返し与えているのである。（中略）
>
> 1943年に、日本は太平洋における戦争を行なっていた。日本に関する限り、この戦争が侵略戦争であることを、かれは充分に知っていた。なぜなら、かれはこの戦争を引き起こした共同謀議者の政策を知っており、実にしばしばこの政策を実行に移すべきではないと進言していたからである。それにもかかわらず、今や、1945年４月13日に辞職するまで、かれはこの戦争の遂行に主要な役割を演じたのである[56]。

しかしこの論理は、少数意見のオランダ代表判事ベルナルト・レーリンクがいうが如く誤っている。レーリンクは次のような反対意見書を提出した。

本裁判所に提出された証拠は、重光が外交官および政治家として、戦争よりはむしろ平和のために働いたことを示している。

多数意見の判決では、戦争をできるだけ早く終わらせるために、戦争内閣に入った者の件においては、刑罰を軽減する理由があるかもしれないことを認めながらも、重光が1943年に入閣したように、外務大臣という資格でそのような内閣に入ったという事実だけでも、それ自体で犯罪であると主張されている。この見解は正しくなく、支持し得ないように思われる。(中略)内閣に入り、平和のために努力し得るのに必要な権力を持つようになる地位につくことは、犯罪どころか、むしろ義務である[57]。

訴因54・55は捕虜問題であるが、これは当時の日本にあっては外相の責任ではなく軍の責任問題であった。レーリンクも反対意見書で、次のように述べている。

捕虜は政府の権内にあるべきだというヘーグ条約の規定にもかからず、日本の国内法は、捕虜の取扱いをもっぱら陸海軍省と現地の指揮官に割当てたということを人は遺憾とするかもしれない。しかし、これが法律であったのであり、その法律に対して、重光は責任がないという事実にかんがみ、かれは外務大臣として、訴因第五十四と、第五十五の中のかれに対する訴追について、無罪となるべきものである[58]。

外相としての重光は、この問題で出来うる限りの努力をしていた。重光は「俘虜問題に付て自分が最善を尽したことを法廷は知って居るのである。斯様な云ひがかりは蘇連判事を満足させる為めの英米判事の妥協に過ぎないことは余りに見えすいて居る[59]」と述べたが、その通りであったことは後にキーナン主席検事が告白する。

重光有罪の報に接すると、重光無罪の口供書を書いてくれた欧米の友人・知人は重光の再審を請願した。チャーチル元首相さえ、重光の善意を証明してくれた。だがその効果もなく、1950(昭和25)年11月21日に仮釈放になるまで、巣鴨の獄中生活を余儀なくされた。

重光は1951(昭和26)年11月7日に刑期を満了し、翌年3月14日には追放解除も内定するのであるが、その追放解除内定に先立ち2月9日付けで、キーナン元主席検事は重光の弁護人だったジョージ・A・ファーネス宛に、大略次のような書簡を出した。

1948年、裁判の終了に際して、私は、重光氏が裁判にかけられたこと、そして有罪の判決を受けたことについて、遺憾だったということを前にも公表したことがありました。裁判を受くべき者を選ぶのは、主席検事であった私の責任であることに間違いありません。東京裁判では十にのぼる国、または連邦構成員が戦争犯罪人訴追に加わっていたので、被告の人選及び起訴については全員の意見をまとめる、いわゆる検事一体の原則によるのが適当な方法だと思ったのです。私が重光氏を戦犯として不本意ながら起訴することに同意したのは実に、こうした理由からでした。裁判が進むにつれ、重光氏を引き入れたことが、正義と公平に副うものかどうかに、私の疑問はますます深まりました。起訴中止のための手段、私は、その責務を推し進めるべきだったのでしょう。率直にいいます。私は起訴されても彼のケースは無罪になると信じていたので、そうでない結果になり非常に困惑しました。(中略)本国に帰ってから、私は、彼が割に早目に釈放されたと知って、わずかに安心しました。しかしそれは重光氏が、当然受けてよいうちのホンの一部分で、パージのリストから除かれることこそ、いちばん直截な、正しい処置だと考えます。これから先、われわれが直面している混乱した時代に、日本人は重光

氏の如き経験と信念の士を必要とするでありましょう。私は、裁判当時の彼の弁護人である貴方にこの手紙をお送りします。私は、正義の結論をもたらす権限ある当局に対しても同様の声明または説明を喜んでなす積りでありますが、とりあえずこの手紙は貴方が適当と思う方法で自由に御使用願いたいのであります[60]。

裁判と獄中生活の４年半の間、重光は獄中日記と膨大な手記を書いた。そのうち『巣鴨日記』・『続巣鴨日記』・『昭和の動乱』は、出獄後公刊された。

８．日ソ国交回復と国連加盟

1952（昭和27）年３月24日に公職追放を解除された重光は、その少し前に結成された改進党に乞われて、６月13日、総裁に就任した。10月には大分県第２区から衆議院選に立候補し、衆議院議員になった。改進党は1954年11月、鳩山一郎率いる自由党反主流派や日本自由党と合同して日本民主党となった。鳩山が総裁で、重光が副総裁であった。12月に鳩山内閣が成立すると、重光は副首相兼外相に就任した。３度目の外相である。

外相として重光は日ソ国交回復と国連加盟を成し遂げた。しかし今になっても惜しいのは、日ソ間で領土問題が解決しなかったことである。全権委員として1956（昭和31）年７月に訪ソした重光は、前内閣の吉田茂首相が結んだサンフランシスコ平和条約で千島列島に関する一切の権利を放棄し、その後の国会での質問に対し西村条約局長は「サンフランシスコ条約で放棄した千島列島に択捉・国後両島は含まれる」と答弁しているのであるから、歯舞・色丹返還だけで日ソ平和条約締結を決断した。しかし鳩山首相は、重光の決断を拒絶した。鳩山一郎首相と、領土問題よりも漁業交渉の妥結を優先させる側近の河野一郎農相は領土問題棚上げによる国交回復を図ろうとしたのである。アメリカのダレス国務長官も、日本が択捉・国後を放棄するのであればアメリカは将来とも沖縄を返還しないと圧力を加えてきた。日ソが領土問題を解決して親善関係に入ることは、ソ連と厳しく対立している冷戦時代のアメリカの国益に反したのである。

その後50年以上たった今日の事態はどうであろうか。択捉・国後どころか歯舞・色丹も、永久に返還されないのではないか。重光は領土問題の棚上げ＝継続審議をソ連に約束させても、ソ連は自分の都合で勝手に考えを変える国であり、フルシチョフが歯舞・色丹を返すと言っている時に取り返しておくべきだとの考えだった。筆者は、重光の決断に従い歯舞・色丹の返還だけで日ソ平和条約を結んでおくべきだったと思うが、如何であろうか[61]。

それはともかく日ソ国交回復によって、拒否権を持つソ連も日本の国連加盟に賛成した。12月18日、国連総会は全会一致で日本の国連加盟を可決した。続いて重光は、初の国連総会日本政府代表として、国連総会で演説した。重光は「わが国の今日の政治・経済・文化の実質は過去１世紀にわたる欧米及びアジア両文明の融合の産物であって、日本はある意味において東西のかけ橋となり得るのであります。このような地位にある日本は、その大きな責任を充分理解しているのであります。私は本総会において、日本が国際連合の崇高な目的に対し誠実に奉仕する決意を有することを再び表明して、私の演説を終わります[62]」と結んだ。

車椅子生活を余儀なくさせるほど健康状態を悪化させていた鳩山一郎の内閣は、12月20日に総辞職した。重光が帰国した時には後継の石橋湛山内閣ができており、すでに外相ではなくなっていた。引退生活に入った重光は翌1957年新春早々郷土を訪問した。１月15日には杵築市八坂の父母の墓に参った。その折、松林から守江湾を望んで、「古里の山に向ひて叫びたし　わがちちははの墓のある森」と詠んだ。同日には、杵築市の成人式に列席もした。17日には母校の杵築高校

で講演もした。そして国東半島を一周し、日田・由布院・別府と巡って帰京した。ところがなんと１週間後の１月26日、神奈川県湯河原の別荘で狭心症のため急逝した。享年69歳であった。国連総会で演説してから40日にもならない急逝であった。しかしある意味で羨ましい死に方ではあった。

注

1　『重光葵写真集』（向陽祭記念事業実行委員会、1987年１月26日刊）に「昭和30年神奈川県湯河原の別荘を散策」中の写真が収められているが、「珍しい笑顔の重光葵」と付記されている。筆者はこの写真以外に笑顔の重光の写真を見たことがない。

2　岡崎久彦『重光・東郷とその時代』（PHP 研究所）324頁。

3　辻野功編『大分学・大分楽Ⅲ−地域再生』（明石書店）所収。

4　『別府大学紀要』第48号所収。

5　重光葵『隻脚記』（重光簇）95頁。

6　豊田国男・西香山編『重光向陽小伝』（二豊の文化社）8-9頁。

7　『隻脚記』98頁。

8　『重光向陽小伝』28頁。

9　重光葵『重光葵　外交的回想』（日本図書センター）125頁。

10　同上145頁。

11　同上148-149頁。

12　同上149頁。

13　同上143頁。

14　同上149頁。

15　『隻脚記』８頁。

16　同上９頁。

17　同上12頁。

18　同上14頁。

19　同上19頁。

20　重光葵『昭和の動乱』上（中公文庫）78頁。

21・22　鈴木一『鈴木貫太郎自伝』（時事通信社）259頁。

23　『隻脚記』121頁。

24　ウィンストン・チャーチル著・中野忠夫訳『血と涙と』（新潮社）14頁。

25　『重光葵　外交回想録』288頁。

26　同上289頁。

27　重光葵『重光葵手記』（中央公論社）111頁。

28　同上240頁。

29　同上241頁。

30　同上244頁。

31・32　同上248頁。

33・34・35　『重光葵　外交回想録』328頁。

36・37　重光葵『昭和の動乱』下（中公文庫）294頁。

38　『重光葵手記』523頁。

39　加瀬俊一『ミズリー号への道程』（文芸春秋新社）178頁。

40　同上345・６頁。

41　『昭和の動乱』下342頁。

42・43　同上335頁。

44　ダグラス・マッカーサー著・津島一夫訳『マッカーサー大戦回顧録』下（中公文庫）160-162頁。

45　『重光葵手記』540頁。

46　マッカーサー連合国軍総司令官の名前で、９月３日午前６時を期して①天皇の権限は連合国軍総司令官に従属する、②日本の裁判所は機能を停止し、民事刑事裁判は米国の軍事法廷おいて処理する、③円貨の通用を停止し米軍の軍票を以って代えるの、３種のポスターを３日６時に全国に張り出す予定であった。しかし岡崎勝男・外務省終戦連絡中央事務局長官の２日深夜の事前折衝で３日６時の布告だけは延期されていた。

47　『重光葵手記』542頁。

48　同上597頁。

49　同上600頁。

50　重光葵『巣鴨日記』（文芸春秋新社）４頁。

51・52　同上63頁。

53　同上122頁。

54　同上29頁。

55　しかし松井は南京大虐殺の責任を問われ死刑となった。

56　朝日新聞法廷記者団『東京裁判』下巻（東京裁判刊行会）151頁。

57　同上341頁。

58　同上342頁。

59　『巣鴨日記』444頁。

60　『朝日新聞』・『毎日新聞』1952（昭和27）年３月15日。

61　『日本経済新聞』2007年６月４日号によれば、モスクワ郊外の大統領別荘で『日本経済新聞』などと会見したプーチン・ロシア大統領は「４島の帰属性がロシア側にある点に議論の余地はない」と強調し、平和条約締結後の２島引渡しを定めた1956年の日ソ共同宣言に言及し、「２島の引渡しを拒否したのは日本側だ」と述べている。

62　渡邊行男『重光葵』（中公新書）237頁より孫引き。